

庶民と「文学」のであい

大谷大学 中川 眞二

A 『日本永代蔵』（新編日本古典文学全集68「井原西鶴集3」）貞享五年（一六八八）

惣じて大坂の手前よろしき人、代々つづきしにはあらず。大方は吉蔵・三助がなりあがり、銀持になり、その時をえて、詩歌、鞠、楊弓、琴、笛、鼓、香会、茶の湯も、おのづからに覚えてよき人付会、むかしの片言もうさりぬ。

B 『粟津家記録』『浄瑠璃本平太郎記版行一件』（大谷大学図書館蔵・函号 閩函）

- 1 一 開山聖人縁起上下巻之儀は従先規寺法として諸末寺之族望に任せ拝讀之儀許容之上役人傳受せしむる作法に而候故中々末々に而私として拝見難成書物に而御座候ひらかなに直し士民下臈の類迄心易よみ申候へは家の傳受寺法難相立候其上右草紙之内の繪は於本寺役人候而繪傳四幅に調御門跡自筆に而裏書被認末寺共へ授与候其札式有之事に候然者旁以寺法之障に罷成候如御存知當本願寺儀は御公儀より御知行不被遣候得共如此の作法を以末寺門徒の助成として相立義に御座候間諸宗格別之道理御聞届被成可被下候事
- 2 一 ひらかなに仕候親鸞の御傳之本に付御とかめ被成候哉かたかな書之本はいく色も御座候 是は不苦候哉

- 1 -

C 『仁勢物語』寛永一六〇一七年（一六三九〇）／『伊勢物語』平安時代前期（九〇〇）（日本古典文学大系90）（日本古典文学全集8）

（初段）  
をかし、男頬被り（ほおかぶ）りして、奈良の京（みやこ）春日の里へ、酒飲みに行きけり。その里にいと生臭き魚、腹赤といふ有りけり。此男（このおとこ）買ふて見にけり。おもほえず、古巾着（ふるきんちやく）に、いとはした錢（ぜに）もあらさりければ、心地まどひにけり。男の着たりける借り着る物を脱ぎて、魚の佃（あたい）にやる。其男、洩染の着る物をなむ着たりける。

春日野の 魚に脱ぎし 借り着物  
酒飲みたれば 寒さ知られず  
となむ。又つきて飲みけり。酔（よい）て、

むかし、男、初冠（うひかうぶり）して、奈良の京（みやこ）春日の里に、しるよしして、狩にいにけり。その里に、いとなまめいたる女はらからすみけり。この男かいまみてけり。思ほえず、ふる里にいとはしたなくてありければ、心地まどひにけり。男の、着たりける狩衣（かりぎぬ）の裾をさきて、歌を書きてやる。その男、信夫摺（しのぶずり）の狩衣をなむ着たりける。

春日野の 若むらさきの すりごろも  
しのぶの乱れ かぎりしられず

面白き事どもや思ひけん。  
道すがら しどろもちずり 足元は  
乱れそめにし 我奈良酒に  
といふ歌の心ばへなり。昔人は、かくいらちたる飲みやうをなんしける。

（第十二段）

をかし、男ありけり。吉利支丹（きりしたん）の御法度ありて、武蔵野へ連れて行ほどに、咎人（とがびと）なれば、町奉行に搦（から）められにけり。女も男も、草村の中に置きて、火付けんとす。女侘びて、  
武蔵野は 今日ほな焼きそ 浅草や  
夫も転べり 我も転べり  
と詠みけるを聞て、夫婦ながら扶（たすけ）て放ちけり。

となむおひつきていひやりける。ついでおもしろきことともや思ひけむ。  
みちのくの しのぶもちずり  
たれゆゑに

乱れそめにし われならなくに  
といふ歌の心ばへなり。昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける。

むかし、男ありけり。人のむすめを盗みて、武蔵野へ率（あ）てゆくほどに、ぬすびとなりければ、国の守にからめられにけり。女をば草むらのなかに置きて、逃げにけり。道来る人、「この野はぬすびとあなり」とて、火つけむとす。女わびて、  
武蔵野は 今日ほな焼きそ 若草の  
つまもこもれり われもこもれり  
とよみけるを聞きて、女をばとりて、ともに率ていにけり。

D

1 片仮名本『因果物語』上巻第八話（仮名草子集成4）寛文元年（一六六一）刊行

八 愛執深女人、忽蛇体ト成事付夫婦蛇ノ事  
勢州桑名ノ町ニ。向合ニ。十五歳ノ男ノ子ト。十四歳ノ女子ト在ケルニ。女子、何トナク。ウロ／＼ト煩フ事アリ。其様体、不思議也、トテ。委ク聞バ。向ナル十五歳ノ。男子ヲ思故也、ト、云。  
去程ニ、向ナル男子ノ親ニ語ケレバ。然バ我子ニ、此由知セヨ、トテ。親キ友達ニ問セケレバ。子モ請合ケル間。迎取テ、寢屋ニ入ケルニ。日高クナルマデ起ズ。不思議ニ思。戸ヲ明テ見バ。女子、男子ノ頭ヨリ。肩マデ吞入テ。女ノ手ニテ、男ノ肩ヲ押テ。共ニ死シ居タリ。  
寛永十年ノコト也、ト、或人語也

2 平仮名本『因果物語』巻一第五話（『仮名草子集成』4）

五 恋故、蛇身と成て、夫をとりし事  
伊勢の国桑名の町に、家のむかひあわせに、十五才になる男子と、十四才になる女子とあり。  
此の女子うつらくとわづらひけるに、さまざま療治すれとも、次第くにおもくなりをとろへ行けり。親あまりの悲しさに、心もちはいかにあると問けれとも、物もいはず只うかくとしてわづらひけり。やう／＼おもく極まり、今は、やせん方なく成けるとき、此むすめしたしき友だち呼よせてかたりけるやうは、申すにつけてはづかし

けれども、わがわづらひはくすりの力にては本復すへからず。されは、いか成因果のむくひにやあるらん。此家のむかひに十五になる男子をおもひかけて、わするゝひまもなく、恋しき事誠にやるかたなし。今はこれゆへにむなしく成へしと、なくなくかきくときけり。友だちやかて娘の親に委かたりければ、即かの男子のおやに、此よし角と嘆く。

さらばわが子にかたりきかせよとて、したしき友だちをたのみてかたらせければ、かの男子聞て、それほどにおもはん事こそやさしけれ。ともかくもとうけ合侍へり。ほどなく祝言しければ、むすめも大によるこび、わづらひも心ちよく成にけり。

さてその夜、寝屋にうつりけるに、すてに夜あけて日の闌たれども、二人の者おきあがらず。やうく、昼にかたふけども出ざりければ、あやしみてねやの戸を開ておこせとも音もせざる故に、ちかく立入てみければ、かの男子を頭より肩まで、女子の口に飲いれて、耳の脇まで口は引さけ、両の手にて男子の肩を押へて、二人とも死て有りけり。

寛永十五年の事也。かくれなき物かたり也。心にふかくおもひ入たるところ、まことに生ながら衆合地ごとくにおちたりとおほえて、あはれなり。

E 『因果物語』本文比較（仮名草子集成4）

（平仮名本）

1 四 抜参宮を折檻して、罰あたりし事

（前文略）

角て、三日めに、兄弟ある中に、弟なにごろもなく、火の端に居たるを、兄がわざとして、火の中へつきたをしけれハ、則、やけ死にけり  
人々、いかさまにも、彼子守を、せつかんして、ぬけ参りを、いましめたるゆへに、太神宮の御罰也、と、申あへり  
すべて、神仏に付て、人のおこす信心を、何かと、さまたげて、打さまさるものは、かならず、わざハひにあふ事、又、ためしおほく侍へり

（巻一）

2 七 法師の、馬に成たる事

これも、おなし、あたりちかく、江村といふ在所あり、その里に、受泉といへる法師あり、草堂の房主なり、このほうし、わかき時分より、馬工郎をいたして、世をわたる、たすけとす

（片仮名本）

一 神明利生之事付御罰之事

（前文略）

然ニ、三日目に。彼子、火ノハタニ居タルヲ。兄、ヒシトツキ倒シケルニ。則チ、火ニ入テ死ケリ。諸人、伊勢ノ御罰ヲ蒙リタリ、ト、云リ、ト。其近所ノ有閑、物語也

（中巻）

三 生ナガラ、馬ト成僧ノ事付馬ノ

真似スル僧ノ事

三州岡ト云村ノ近辺。江村ト云処ニ。聚泉ト云、独庵坊主。馬口勞ヲ業トシテ。世ヲ渡ケリ。  
寛永十六年ノ春。不凶、煩付テ。百日

寛永十六年の春より、わづらひつきけるか、たゞ、馬のまねをして、いなゞき、又ハ、臥ながら、手をつかへて、はねをどりけり、人々、付そひて、押臥なん、と、しけれども静まらず、人のなき透間を見て、馬屋にかけ入つゝ、手あしを立て、あがき狂ひ、後にハ、力つよく、心たけくなりて、人を見てハ、とひかゝり、くらひつきければ、すへきやうもなく、馬屋の前に、柵を結て、をしこめたり、水をのむも、食をあたふるも、馬桶に入て、さしいるゝを、口をさしよせて、くらひけり、その比、年ハ、卅七八にてもや侍へらん、百日ハかり、くるひて、死けり

（巻一）

3 十四 親雲雀、わが子に替て、鷹にとられし事

（前文略）

正保年中の事なるに、三川の国衣と云所に、鈴木作兵衛とて、有徳成、町人あり、鷹をすきて、つかひけり  
ある時、雲雀の子に、鷹を合せけるに鷹の間ぢかく成たる時に、親雲雀、わが子と、鷹とのあひたに、立隔ちつゝ、鷹にとられて、子をたすけたり  
焼野の雉子夜るの鶴ハ、子を思ふためしに、する事なるに、少き雲雀までも、子を思ふ心にハ、替りめなし、と、おぼゆ  
されバ、ちく生より、人間にいたるまで、子ハ、親を思ふ心の、ふかゝらざるこそ、悲しけれ

（巻一）

程、馬ノ真似シテ。雑水ヲ馬桶ニ入テ吞セ。即、厩ニ入テ置ニ。四足ニ立テ。足掻シテ、力強、気色怖布ナリ。卅八歳ニテ死ニケリ。

（下巻）

十 母鳥、子之命ニ替事付猿、寺工来、子ノ弔ヲ頼事

三州衣ト云処ニ。鈴木作兵衛ト云町人。鷹数寄ニテ。或時、子雲雀ニ鷹ヲ逢セケルニ。鳥間近キ、処ニ、母鳥居ケルガ。子ト鷹トノ。合ヲ隔テ取ラレケリ。作兵衛、是ヲ見テ。則チ、鷹ヲ休メケリ。正保年中ノ事也

（中巻）

F 『勸信念仏集』（大谷大学図書館蔵・宗大 二六二八）貞享五年（一六八八）刊行

それ世の中の有さま。人の身の無常なる事行河の流れて。又もとの水にあらぬが如し只何事もみないつはりの世に。老と死とのふたつばかりは。まことにして是をのがるゝ人なし今年の姿は去年の形ちに似ず。けふの命はきのふに帰らず。出ている息の程にも。かたふくは身のよはひ。つゞまるは命なり。

G

1 『勸信念仏集』

初めある物は終りあり逢ものには必らず別る比翼連理のかたらひ階老同穴の契りも更にそひはつべき此世ならず中関白通隆公の御むすめ貞子の皇后は一条院の御きさきなり御なやみおもおはしける中に

夜とともに契りしことを忘れずはこひん涙の色ぞゆかしき

とかきて御几帳のひもにむすびつけさせ給ひけるを。うしなひ奉りて後。かの御らんじつけさせ給ふける御こゝろのうち。忍びがたく覚えさせたまひけん独りむまれし我身なれば。ゆく時も又独り行べし（三才）したしき妻子わりなき友だち。つれてもゆかずつれられもせず。まぼろしの身を夢の世にをきながら。しばしのたのしみに時をうしなひ明日までとおもひのべて無常のことほりを打わすれ後の世のわざけふのつとめにをこたるも。われながらいと口おし。

2 『十訓抄』（新編日本古典文学全集51）

この後のなやみ、重くならせ給ひけるころ、

夜とともに契りしことを忘れずは恋ひむ涙の色ぞゆかしき

と書きて、几帳のひもに結び付け給ひけるを、失せ給ひて、院、御覽じつれたりける。御心中、さこそ忍びがたくおぼえさせ給ひけめ。

H

1 『勸信念仏集』

たま／＼思ひよりて座禅の床にのぼれば業障の闇にいよ／＼まよひて暫らく観念の窓に臨めは妄想の風にます／＼静ならずいよ／＼この心をいましめ思ふに歎かしき事ならずや人に別れ人にをくれて。悲しみにしづむ涙の淵は底ふかくなれども菩提の種とは思ひつけずたゞその人を歎くばかりいとつれなき心ぞかし良峯の少将は深草天皇にをくれ奉りてかなしさのあまりに世をのがれてまことの道に入る遍昭僧正とぞいひけるそのとき（七才）深草にこもりて御ちういんのはての日。人々衣を更るよしを聞て

みな人は花の快に成にけり昔の衣よかはきたにせよ

とよみて出ていにつゝ諸国を修行して後は花山おこなひけり思ひしるにはかくぞのがれまほし。いかなればうき事にこりても／＼椎柴の。こりはてぬ心こそ浅ましけれ然るに我らずに常住仏性の種はそなへながら自他おなじく流転無窮の凡夫として希に

甘露の妙薬を得ながら。嘗ずして煩惱の病をまし。みよりの舟はむなく生死の浪にたゞ（七ウ）よひ。をしへの月はいたづらに流転の雲におほはれたり

2 『古今和歌集』（新編日本古典文学全集11）

深草の帝の御時に、蔵人頭にて夜昼馴れつかうまつりけるを、諒闇になりければ、さらに世にもまじらはずして比叡の山にのぼりて頭おろしてけり。そのまたの年、みな人御服脱ぎて、あるは冠賜はりなど、よろこびけるを聞きてよめる

僧正遍昭

847 みな人は花の衣になりぬなり昔の袂よかわきだにせよ

3 『沙石集』（新編日本古典文学全集52）

昔、良少将、深草の天皇に後れ奉りて、世を通れ、実の道に入りて、行ひけれども、かの御名残悲しくて、御果てに、人々衣替ふるよし聞きて、

みな人は花の袂になりけり昔の衣よかはきだにせよ

